青森ねぶた祭におけるねぶた題材の変遷

阿　南　　透*

はじめに

青森ねぶた祭は，日本を代表する夏祭りの一つとして知られている。古くからの伝統に裏打ちされた行事のようにも見えるが，特定社寺と結びついた宗教行事ではなく，起源や由来も定かではない。また，1980年に国の重要無形民俗文化財に指定されたが，大型灯籠であるねぶた本体は毎年新しく作られ，祭りが終わると棄てられる，一年限りの作品である。しかも，本体の「題材」は毎回変わる。何を取り上げるか，制作者は毎回創意工夫を凝らす。伝統的に見えながらも，創造性を発揮する場という一面を持つ行事である。

私はこれまでも青森ねぶた祭についての論考を発表してきたが[1]，本稿はねぶたの題材に焦点を絞り，その変遷を総体として考察するものである。

1．青森ねぶた祭の特徴

青森ねぶた祭の日程は，８月１日に前夜祭があり，２～６日の夜に市内中心部で合同運行が行われる。そして７日は昼の合同運行があり，夜の海上運行ですべての行事が終了する。合同運行には，現在では22台の大型ねぶたが登場する[2]。「東北三大祭」の一つとされていることもあり，６日間の人出はピーク時には380万人を超した[3]，全国有数の大規模な祭りである。

「ねぶた」「ねぷた」等の名称で呼ばれる類似行事は，他にも青森県津軽地方を中心に分布するが，青森市のねぶたがそうした他のねぶた[4]と異なる特徴をまとめてみよう。

第一に，青森市のねぶたは，巨大な燈籠であるねぶた本体に加え，囃子，それにハネトと呼ばれる踊り子，この三つの要素から構成されている。特に大人数のハネトの存在は，他のねぶたにはない特徴である。

第二に，現在の青森市のねぶた本体は，針金の枠組に紙を貼った人形燈籠を，中から電球や蛍光灯で照らしたもので，歌舞伎の名場面や，日本や中国の歴史・伝説などから題材を取り，人形一つないし二つ（まれに三つ以上）から構成される。大きさは，大型ねぶたの場合，高さ５メートル（台車を含む），幅９メートル，奥行き７メートルという，横長の平べったい空間に収めなければならない。幅に比べて高さが低いため，重心の低い，這いつくばったような姿勢が特徴である。

第三に，青森市のねぶた本体を載せている台車はリヤカーが発展し大型化したものである。トラックのタイヤを用い，車輪は二輪で，引き綱を用いず，引き手と呼ばれる前後の棒を押して動かす。このため，急停止や旋回，上下動など，機敏な動きが可能である。これは他のねぶたや，全国各地の山車・曳山・屋台にない特徴である。

第四に，青森市のねぶたを出す団体は運行団体と呼ばれる。大型ねぶたについては，町内会などの地縁組織が減少し，企業や公共団体が多くなっている。これは経費の高額化に伴い，地縁組織には運行費用をまかないきれなくなったことに原因がある。そして大型ねぶたの運行団体は「ねぶた師」と呼ばれる外部の専門家にねぶた制作を発注している。

第五に，青森市では，大型ねぶた制作者としての「ねぶた師」という専門家の地位が確立してい

2010年11月30日受付
* 江戸川大学　ライフデザイン学科教授　民俗学

る。現在，青森市では22台の大型ねぶたのうち１台は市民有志による自主制作であるが，他の21台を12人のねぶた師が制作している（子供ねぶたや地域ねぶたは，市民による自主制作が主流である）。ねぶた師は，運行団体から大型ねぶた制作を受注し，費用の支払いを受けてねぶたを制作する。ねぶた師はそれぞれ，数名から十名弱のスタッフ（弟子や電気の専門家）を抱え，紙貼りに主婦をアルバイトで雇うなど，一種の制作集団を率いている。各団体の制作者名は新聞や毎年の祭りパンフレットに掲載され，市民には周知のものである。しかし制作者としての経済的地位は，ねぶた制作だけで全員が生活できるほどには高くなく，本業を別に持っている者が大部分である。それでも，以前は単なる「物好きの道楽」としか見なされなかったことを考えると，青森市ではねぶた制作者の地位が「職人」から「芸術家」へと徐々に向上しつつある[5]。そしてこれまでに四人が，青森市から「ねぶた名人」の称号を授与されている[6]。なお，大型ねぶたを作るねぶた師になるためには，ねぶた師に弟子入りして修業するのが一般的である。少しずつ作業を任されながら，小型ねぶたを制作し，大型ねぶたの制作と独立のチャンスを待つという，一種の徒弟制度がいまだ健在である。このように，大型ねぶたに関して外部からの安易な新規参入を阻む仕組みが存在するのは，運行団体の側が，一定水準の大型ねぶたを一定期間内に制作するための能力保証を徒弟制度に見いだしているためである。なお，周辺他都市では，青森のように制作者の名がはっきり知られているのは，弘前や黒石の一部のねぷたに限られるようである。

第六に，莫大な数の観光客がやってくるのも青森市ならではの特徴である。青森ねぶたは，1962年に仙台七夕，秋田竿燈とともに「東北三大祭」と名乗り，観光客の誘致に力を入れ始めた。その後もさまざまな経緯があり，近年では六日間の期間でコンスタントに350万人以上を集めている。これは近隣諸都市のねぶたとは大きく異なる特徴である。

第七に，ねぶたの出来映えを審査・表彰する仕組みがある。ねぶた本体，囃子，運行ハネトの３部門を別々に採点し，それらの総合得点で，１位にねぶた大賞，２位に知事賞，３位に市長賞，４位に商工会議所会頭賞，５位に観光コンベンション協会会長賞を贈るというのが現在の仕組みである[7]。この賞を巡る競い合いが，運行団体を熱中させるものとなっている。

以上，七点ほど青森市のねぶたの特徴を列挙したが，これらはいずれも戦後の青森ねぶたにのみ見られる特徴である。

２．なぜ題材を問題にするのか

既に述べたように，青森ねぶた祭ではねぶた師が毎年新たにねぶた本体を制作する。ねぶたの題材（テーマ）は，基本的に一人から三人の人物を造形し，日本や中国などの故事を表現することになっているが，サイズ以外にはルールがあるわけではなく，何を作るかはねぶた師の裁量にゆだねられている。このため，ねぶたの題材は，画家が画題を選択するように，ねぶた師が創造性を発揮する場である。

ねぶたの題材はねぶた師が決定するものの，発注者である運行団体に受け入れられて初めて制作が可能になる。運行団体は，市民に受け入れられる題材であるかどうかを考慮するので，題材の選択は，当時の世相や社会情勢と無縁ではあり得ない。流行の映画や小説，テレビドラマの影響を受けることもある。その一方で，あえて伝統を強調し，定番ともいえる題材を扱いながらも，造形上の工夫を施すこともある。

もちろん，題材を決めたらねぶたの形が自動的に決まるわけではない。ねぶた師は題材を的確に表現する形状を追究し，しかるべき造形に到達する。形や色，場面選択といった造形にも制作者の創造性が発揮されるため，同じ題材でも制作者が異なればまったく違った形になることも珍しくない。特に，審査による表彰制度が存在するため，他の制作者はライバルであり，新工夫により違いを明確にすることは，好成績を得るための条件ともなりうる。

このように，ねぶたの題材は青森ねぶた祭にとって非常に重要な要素なのである。そこで本稿では，題材の実態とその変遷を明らかにする。その際，個々のねぶた師の思想や作風などを研究する「作家論」を出発点にする方法もある。しかし，戦後に現在のねぶたの様式が確立してから約60年の間に，題名と題材が判明したねぶただけでも1200台以上が作られている。制作者名が明らかなねぶた師は少なくとも60人いるが，１人あたりの制作台数はさほど多くない[8]。そこで今回は，戦後青森ねぶたの流れを総体として捉え，個々の制作者ではなく総体としてのねぶたの題材の変遷を扱う。

しかし，既に述べたように，ねぶたの題材の研究は造形の研究と平行して行われるべきものである。今回は準備と紙幅の都合上，題材を広く俯瞰して，全般的傾向を考察することにとどめるが，造形については稿を改めて考察したいと考えている。

３．題材の分類

ここで，ねぶたの題材について記した資料について記しておきたい。

現在の青森ねぶた祭では，主催者が毎年観光客向けに小冊子を発行しており，その年に出陣する大型ねぶたの下絵（原画）と説明がその中に収録されている。このような小冊子の発行は1976年に始まる。今回は，この小冊子をねぶたの題材を判断するために使用した。ただし，1981～85年はその年のねぶたの説明がなく，別の資料から題名は判明したものの，詳しい内容を明らかにし得なかった。

1975年以前には，その年のねぶたの題材を説明するまとまった資料はない。題名だけは主催者資料や地方新聞により判明するものの，全題名がわかるのは1952年以後のことであり，それ以前は断片的な記録しかない[9]。

こうした資料をもとに，題名が判明する1251台のねぶたの題材を確認していったが，資料がない時期の作業は困難を極めた。1946年から1951年までは，完全ではないねぶた一覧をもとに題材を推測した。このため遺漏もあることと思われる。1952年から1975年と，1981年から1985年は，ねぶたの題名は判明しているものの題材は必ずしも判明しないため，題名と写真から可能な限り題材を推測した。

題材の分類もまた非常に難しいものがあるが，ここでは２段階の分類を採用した。

最初に，大まかに「日本」「中国」「青森」「歌舞伎」「宗教」「その他」という６つに分類した。

「日本」には，日本の歴史，伝説，神話，物語などを含めた。これらは他の祭礼でも，山車や民俗芸能の題材として登場することがある。なお，制作者が青森県内の歴史や伝説を意識的に扱った場合は「青森」として分類した。これは，郷土の題材を意識的に取り上げる傾向の登場を反映してのことである。「歌舞伎」は歌舞伎の演目である。しかし，歌舞伎自体が日本の歴史や伝説に取材しているため，制作者が歌舞伎の題材として意識して作っている場合に限りここに含めた。「中国」は，水滸伝・三国志といった中国の物語や，中国の歴史に取材したものである。「宗教」は，仏像と神話がほとんどであるが，仏教・修験道・陰陽道などの高僧をねぶたにしたものを含めた。いずれにも当てはまらないものを「その他」とした。

このように大まかに分類した上で，次に題材を細かく分類した。しかし初期の題名には「三国志」「水滸伝」「八犬伝」など，漠然としたものも多く，具体的な場面を確定するには情報不足であった。このため，「三国志」など漠然とした題材名を宛てて暫定的な処理をせざるを得ないケースも多かった。この結果，これまでに506の題材が作られたことがひとまず明らかになった。総数が1251台であるから，平均すると同じ題材が約2.5回作られてきたことになる。

４．大分類

ここでは，大分類の全体的な変化について，５年ごとに区切って傾向を見てみることにする（表１）。

表１　ねぶた題材　大分類（単位パーセント）

	1946-50	1951-55	1956-60	1961-65	1966-70	1971-75	1976-80	1981-85	1986-90	1991-95	1996-00	2001-05	2006-10	平均
日　本	82.5	82.5	83.3	79.7	68.9	60.5	80.7	66.3	67.6	58.1	46.7	46.4	44.5	65.1
中　国	6.3	3.2	2.8	6.3	17.6	22.4	14.5	11.9	9.0	13.7	18.9	18.2	21.8	13.0
青　森	1.6	0	0	3.8	1.4	2.6	0	6.9	5.4	7.3	20.5	13.6	15.5	6.9
歌舞伎	3.2	5.6	12.5	6.3	5.4	7.9	4.8	4.0	8.1	6.5	5.7	4.5	3.6	5.9
宗　教	4.8	4.8	1.4	1.3	2.7	6.6	0	10.9	9.0	13.7	8.2	17.3	11.8	7.8
その他	1.6	4.0	0	2.5	4.1	0	0	0	0.9	0.8	0	0	2.7	1.3

１）1946 ～ 50 年

63 台中，「日本」の分類に入るものが 82.5％と圧倒的に多い。戦国時代の合戦や源平の戦いが多く，個別のテーマでは曽我物語に関するもの（曽我兄弟の仇討ち，曽我五郎と御所五郎丸，草摺曳）が８台，さまざまな鬼退治（茨木，桃太郎など）が８台と多い。

次いで多いのが「中国」の 6.3％で，水滸伝に題材を求めたものである。「宗教」4.8％（３台）「歌舞伎」3.2％（２台）と続くが，いずれも１割に満たない。

２）1951 ～ 55 年

126 台中，「日本」の分類に入るものが 82.5％と圧倒的に多いことは変わりがない。曽我物語が 22 台に増加したほか，戦国時代の合戦や源平の戦い，鬼退治などが多い。

それ以外は「歌舞伎」5.6％，「宗教」4.8％，「中国」3.2％と続く。いずれも１割以下で，大勢を占めるには至っていないのは前期と同様である。

３）1956 ～ 60 年

72 台中，「日本」の分類に入るものが 83.3％と圧倒的に多い。これは全期間を通して最大の比率である。次いで「歌舞伎」が 12.5％（９台）と，１割を超える。これもまた全期間を通して最大である。内容は勧進帳，菅原伝授手習鑑，連獅子，伽羅先代萩などさまざまである。

それ以外は，「中国」2.8％「宗教」1.4％と，きわめて少ないのが特徴である。

４）1961 ～ 65 年

79 台中，「日本」の分類に入るものが最多ではあるが，79.7％と減少し始める。前の時期に多かった「歌舞伎」は 6.3％（５台）まで減少する。それと並んだのが「中国」6.3％（５台）で，ここから増加が始まる。「宗教」は 1.3％と，きわめて少ない。

この時期に「青森」に分類しうるねぶたが登場する（3.8％，３台）。1963 年の佐藤伝蔵作「南祖坊と八乃太郎決戦の場」（青湾信用金庫）は十和田湖の伝説であり，同年の佐藤直市作「津軽為信公大垣城の奮戦」（陸上自衛隊）は，津軽藩祖である津軽為信を題材にしたものである。どちらも現在に至るまで何度も制作されるテーマであり，この時期に端を発している。

ちなみに，1962 年から審査・表彰制度が変更になり，最優秀団体に「田村麿賞」が授与されることになった。これは決してねぶた本体だけの出来映えで決まる賞ではなく，またねぶたの題材により決まる賞ではないが，第１回の 1962 年が北川啓三作「村上義光吉野の関所」（日本通運），第２回の 1963 年が同じく北川啓三作「巌流島の決斗」（東北電力青森支店）という「日本もの」，第３回の 1965 年が鹿内一生作「三国志　呂布関羽奮闘の場」という「中国もの」であったことが，当時の題材の傾向を反映するといえるかもしれない（1964 年は受賞作なし）。

５）1966 ～ 70 年

74 台中，「日本」が最多ではあるが，68.9％と大きく減少する。この時期に伸びるのが「中国」で，17.6％（13 台）に達する。内訳は水滸伝５台，三国志４台，漢楚戦争２台，鍾馗２台である。ちなみに 1970 年には，鹿内一生が傑作「項羽の馬投げ」（青森市職員互助会）を制作し，前年の鹿

内一生作「三国志」（青森青年経営協議会）に続き，「中国もの」が二年連続して田村麿賞を受賞した。

「歌舞伎」は5.4%（４台）まで減少する。これ以降，歌舞伎ものは大きな変動がなく，５％程度で推移する。この時期には，1966年に北川啓三作「勧進帳」（青森いすゞ自動車）が田村麿賞を受賞している。

「宗教」は2.7%（２台）と少ないが，1969年に鹿内一生作「龍王と金剛力士」（に組消防若者一同）が登場し，これ以後は憤怒像の仏像がねぶたに登場するに至った。「青森」は1.4%と，きわめて少ない。

６）1971～75年

「日本」の減少，「中国」の増加が顕著になる時期である。76台中，「日本」は60.5%と前期に続き減少する。一方「中国」は22.4%（17台）に達し，これは現在までの最大値である。内訳は水滸伝７台，三国志５台，漢楚戦争２台，鍾馗２台，西遊記１台である。このような増加は，1972年の日中国交正常化に伴う中国ブームの影響かもしれない。

「歌舞伎」は7.9%（６台）で，前期より微増である。この中では，1975年に千葉伸二「暫」（青森青年会議所）が田村麿賞を受賞している。ちなみに「暫」は，千葉伸二が1969年に初制作し（電電公社）２度目のねぶた登場であるが，この受賞を契機に，歌舞伎ねぶたの定番として定着した観があり，現在までにのべ９回制作されている。

「宗教」は数が少ないものの，6.6%と増えている。この中では，1971年の鹿内一生作「金剛力士」（青森市職員互助会），1974年の佐藤伝蔵作「風神雷神」（日立連合）という２つの田村麿賞受賞作があり，以後のねぶたの造形に大きな影響を与えている。

「青森」は2.6%，わずか２台である。しかし1971年の川村勝四郎作「龍馬渡海」（国鉄）は義経渡海伝説をモチーフにして，田村麿賞に次ぐ第２位の知事賞を受賞した。1973年の千葉伸二作「十和田湖伝説　南祖坊と八之太郎」（青森青年会議所）は田村麿賞を受賞した。どちらも何度も作られることになる題材である。

７）1976～80年

この時期には，前の時期と反対に「日本」が急増し，「中国」が減少する。83台中，「日本」は80.7%と，前期から２割増である。これに対し「中国」は14.5%で，約８％の減少である。理由はわからないが，前期の変化が急激すぎて，その揺り戻しがあったと見ることができるかもしれない。「歌舞伎」は4.8%と少ない。「宗教」「青森」「その他」はゼロであった。このように「日本」が目立った時期であったが，これ以後は減少の一途をたどる。

８）1981～85年

101台中，「日本」は66.3%と再び大きく減少する。「中国」も微減で，11.9%にとどまる。

この時期に伸びたのは「宗教」で（10.9%），「中国」に迫る勢いである。過去にあった不動明王，金剛力士，風神雷神に加えて，北村隆作「軍荼利明王」（1984，青森県板金工業組合）が登場し，迫力ある仏像・神像が続出した。その一方で，鹿内一生作「天女祝舞」（1984，東北電力）という，天女を造形したねぶたが登場し，この分野の幅を広げた。

「青森」も6.9%と増加する。過去に作られたテーマのほか，北村明･北村隆作「鬼神お松」（1981，青森県板金工業組合），北村明・北村隆作「竜飛の黒神」（1983，青森市PTA連合会）が登場した。「歌舞伎」は4.0%にとどまった。

９）1986～90年

前期と大きな変化がない時期である。111台中，「日本」は67.6%である。「中国」も微減で，9.0%にとどまる。「宗教」も微減で9.0%である。「歌舞伎」は倍増で8.0%に伸びた。「青森」も微減で，5.4%である。

10）1991～95年

ここでは「日本」の減少が目立つ。124台中，「日本」は58.1%である。一方「中国」は微増で，

13.7% に伸びる。「宗教」も同じく 13.7% である。「歌舞伎」は 6.5% に減少する。これに変わり「青森」が 7.3%にまで伸びる。その中には，1994 年から青森菱友会が，ねぶた師竹浪魁龍（2001 年から竹浪比呂央と改名）と組み，「青森再発見」をテーマに青森県内の歴史伝説に取材したねぶたを作り始めたこと，1995 年に，青森で発掘され大きな話題となった三内丸山遺跡にヒントを得たねぶた，千葉作龍作「三内丸山・縄文鼓動」（コマツ連合）が登場したことが特筆すべき事項である。このことが次期における「青森もの」の急増につながるのである。

11）1996 ～ 2000 年

「日本」が減少し，５割を割るのがこの時期である。122 台中,「日本」は 46.7%である。一方「中国」は 18.9% に伸びる。劇的に伸びたのが「青森」で,「中国」「宗教」を上回る 20.5%にまで伸びる。これは現在までの最高値である。「宗教」は 8.2% に減る。「歌舞伎」は 5.7% に減少する。

「青森もの」の増加は，前期に述べたように，青森菱友会（竹浪魁龍制作）が青森県内の歴史伝説をテーマにしたねぶたを作り続けたこと，縄文をテーマにしたねぶたが６台作られたことに加え，1998 年が青森市制百年にあたり，青森開港をテーマにしたねぶたが３台登場したことが影響している。

12）2001 ～ 05 年

110 台中,「日本」は 46.4%,「中国」は 18.2% で，ほとんど変化がない。前期に激増した「青森」は 13.6％に減少した。これに変わって「宗教」が 17.3%に増加した。「歌舞伎」は 4.5% に減少した。

「青森」の減少は，市制百年や縄文ブームといった前期の増加要因が去ったことによるものであるが，それでも県内の歴史伝説を取り上げたねぶたが一定の比率で作られる傾向がここで定着する。

13）2006 ～ 10 年

110 台中，「日本」は 44.5%，で，ほとんど変化がない。「中国」は 21.8% に増加した。「青森」も 15.5%に増加した。一方，前期に増加した「宗教」は 11.8%に減少した。「歌舞伎」は 3.6% に減少した。それぞれに増減はあるものの，前期との変化はさほど大きなものではない。

こうしてみると，21 世紀に入ってからの傾向は,「日本」が５割弱を占め,「中国」が２割,「宗教」「青森」が 10 ～ 15%,「歌舞伎」が５％弱といった比率でほぼ定着した観がある。

５．題材の小分類

次に，小分類として具体的な題材を細かく分類した。先に述べたように，506 の題材を挙げることができた。

この中には，頻繁に制作される題材もあれば，１回限りのものもある。ここでは 10 台以上制作された題材について, 個別に見てみよう（表２）。

最も多いのが，曽我物語に題材を取った「曽我兄弟の仇討ち」である（24 台）。これは曽我五郎・十郎兄弟が工藤祐経を倒して仇討ちを果たすまでの場面である。また，本懐を遂げた曽我五郎を女装した御所五郎丸が捕らえる「曽我五郎と御所五郎丸」（20 台）と，曽我五郎と朝比奈三郎の力比べ「草摺引」（13 台）も，曽我物語に由来する。このテーマは，1946 年から 1966 年頃まで多く作られたが，次第に少なくなり，2000 年以後は１台しかない（石谷進作「曾我兄弟と工藤祐経」ねぶた愛好会，2001 年）。

次に,「素戔嗚の大蛇退治」が 22 回である。素戔嗚命が八岐大蛇を退治する場面である。力感あふれる素戔嗚と，襲いかかる八岐大蛇（龍）を対比させたねぶたで，現在に至るまでコンスタントに作られている。評価の高い作品も数多く，田村麿賞受賞作に，穐元無生作「素戔嗚尊大蛇退治」（青森市職員互助会，1978），知事賞受賞作に，佐藤伝蔵作「素戔嗚尊の大蛇退治」（日本通運青森支店，1972），福井祥司作「素戔嗚尊の大蛇退治」（日本通運青森支店，1992）がある。

20 回でこれに続く題材が２つある。１つは「鍾馗」である。中国の伝説で，唐の玄宗皇帝の夢に現れたという，小鬼を退治する鍾馗の姿を取り上

表２　10台以上登場した題材

テーマ	台数
曽我兄弟の仇討ち	24
素戔嗚の大蛇退治	22
曽我五郎と御所五郎丸	20
鍾馗の鬼退治	20
本能寺の変	20
羅生門	18
紅葉狩	17
綱館	17
酒呑童子退治	15
川中島の戦い	15
牛若丸と弁慶	14
勧進帳	14
草摺引	13
巌流島の決闘	13
茨木童子	12
南祖坊と八之太郎	12
大森彦七と千早姫	12
宇治川の先陣争い	11
九紋龍と魯智深	11
連獅子	11
草薙剣	11
坂上田村麿	10
桃太郎の鬼退治	10
金剛力士	10
風神雷神	10

げたものである。時期に偏りなく作られ続けているテーマである。知事賞受賞作に，白鳥芳生作「鍾馗」（に組・東芝，1987）がある。

同じく20回が「本能寺の変」である。明智光秀が京都本能寺に織田信長を襲ったという，戦国時代の事件を取り上げたねぶたである。1950～60年代に多く作られ，当時は守る森蘭丸と攻める安田作兵衛の戦いという構図が主であった。1980年代に入ると織田信長が中心の造形に変化する。しかし1997年の石谷進作「織田信長と森蘭丸」（ねぶた愛好会）を最後に，その後は作られていない。

続いて，渡辺綱と茨木童子の戦いに関する一連のねぶたがある。鬼である茨木童子が京都の羅生門で渡辺綱に襲いかかる「羅生門」（18台），茨木童子が渡辺綱の館で切り落とされた左腕を取り戻す「綱館」（17台），ランク外であるが京都の一条戻り橋で茨木童子が渡辺綱に襲いかかる「戻橋」（９台），題名しかわからないため場面不明の「茨木童子」（12台）と，合計56台にもなる。次に，信州戸隠の鬼女・紅葉を平維茂が退治する「紅葉狩」（17台）と，京都・大江山に住む酒呑童子を源頼光，坂田公時らが退治する「酒呑童子退治」（15台）が続く。このように，鬼退治ものとでも総称できる題材は，流行に左右されず頻繁に作られている。しかしその割に受賞作は少なく，鹿内一生作「羅生門」（に組・東芝連合，1979）が田村麿賞，石谷進作「戻橋」（青森マルハねぶた会，1978）が知事賞，竹浪比呂央作「酒呑童子」（JRねぶた実行委員会，2007）が知事賞，北川啓三作「茨木」（青森いすゞ自動車，1969）が奨励賞，白鳥芳生作「羅生門」（に組東芝，1993）が青森公立大学開学記念賞（この年だけの特別賞）を受賞しただけである。

次に回数が多いのは「川中島の戦い」（15台）である。騎馬の上杉謙信と，軍配を持った武田信玄との一騎打ちは，戦国合戦ものの中でも人気を博している。1970，80年代にはそれぞれ１台と減少したものの，約３年に１台のペースでまんべんなく登場している。ただし受賞作は，穐元和生作「川中島の合戦」（東北電力ねぶた愛好会，1991，商工会議所会頭賞）だけである。

次に，「牛若丸と弁慶」（14台）は，京都五条大橋での二人の戦いを題材にしたねぶたである。よく知られたテーマではあるものの，合戦ものと違って迫力を重視する造形ではないためか，1950～70年代には多く作られたが，80年代以降は10年に約１台しか作られていない。

「勧進帳」も同じく14台である。歌舞伎の名場面で，1950年代には5台作られたものの，歌舞伎ねぶた自体が減少していることもあり，その後は減少している。名作として語り継がれるねぶたに，1957年の北川金三郎作「勧進帳」（東北電力青森支店）がある。これは蛍光灯を多用し，ねぶたの作風を変えたと言われる名作である。また北川啓三作「勧進帳」（青森いすゞ自動車，1966），千葉伸二作「勧進帳」（亀屋みなみ流通グループ，1976）が田村麿賞を受賞している。

13台作られているのが「巌流島の決闘」である。宮本武蔵と佐々木小次郎の決闘を題材にしたものである。北川啓三作「巌流島の決斗」（東北電力青森支店，1963）が第2回田村麿賞受賞作として知られている。70年代には制作がないものの，その後も10年に2台程度の制作がある。最新作は石谷進の引退作となった「宮本武蔵と佐々木小次郎」（ねぶた愛好会，2003）である。

続いて12台作られたのが，十和田湖伝説に由来する「南祖坊と八之太郎」である。青森ものの中で最も人気を集めている題材で，1963年の佐藤伝蔵作「南祖坊と八乃太郎決戦の場」を皮切りに，現在までコンスタントに登場している。田村麿賞受賞作に，千葉伸二作「十和田湖伝説　南祖坊と八之太郎」（青森青年会議所，1973）と佐藤伝蔵作「八之太郎と南祖坊」（日立連合ねぶた委員会，1983）がある。特に後者は，ねぶた展示施設「ねぶたの里」に保存されていることもあり，白い水しぶきの表現を流行させたねぶたとして知られる。

同じく12台に「大森彦七と千早姫」がある。楠木正成の怨霊が鬼女となり，千早姫に化けて大森彦七を襲うという怪異譚である。これは初期のねぶたでは盛んに作られたが，1979年を最後に作られていない。造形としては茨木童子ものと類似しているため，そちらに移行したと考えられる。

11台作られた題材は4つある。まず「宇治川の先陣争い」は，源義経が木曾義仲軍を攻撃し，京都の宇治川を渡る際，佐々木高綱と梶原景季が先陣争いをしたという『平家物語』の記載に基づいたものである。有名な題材であるだけにコンスタントに作られているが，川の中を走る騎馬武者の競走であるだけに，馬と水の表現が難しい題材でもある。田村麿賞受賞作に，北村隆作「宇治川の先陣争い」（青森大学，1994）がある。

次に「九紋龍と魯智深」は，水滸伝の登場人物を題材にしたものである。水滸伝はたびたびねぶたに登場するが，108人の登場人物を擁するだけに，誰のどの場面を制作するか，さまざまなヴァリエーションがあり，結果的に10台を越えたのはこの題材だけである。九紋龍史進と花和尚魯智深の組み合わせは，刺青のある好漢の組み合わせとして初期に多く見られたが，1983年の石谷進作「九紋龍と魯智深」（ねぶた愛好会）を最後に，その後は作られていない。

「連獅子」は歌舞伎から取った題材である。70年代には4台作られたが，その後は10年に1台程度と減少している。

「草薙剣」は，日本神話で，日本武尊が剣で野火を払いのけた場面を題材にしたものである。佐藤伝蔵作「草薙の剣」（東青信用組合，1968）と石谷進作「草薙剣」（青森木材青壮年会，1977）が田村麿賞を，最新作の千葉作龍作「日本武尊「草薙の剣」」（消防第二分団・アサヒビール，2007）が観光コンベンション協会賞を受賞している。

10台作られた題材は4つある。まず「坂上田村麿」は，蝦夷征伐に派遣された武将のねぶたである。「田村麿賞」の由来となった武将であり，1980年頃までにたびたび作られたが，その後は少ない。単独で作られたのは10台だが，このほかに征伐された悪路王や阿弖流為と相対した造形もある。しかし賞に関しては，1968年に鹿内一生の「坂上田村麻呂蝦夷征伐」（消防第三分団）が奨励賞を受賞したのみである。

「桃太郎の鬼退治」は，童話に題材を取ったものである。1950年代に多く見られたが，その後はまれになり，1978年の福地誠郎作「桃太郎」（私たちのねぶた自主製作実行委員会）が最後である。

以下の2つは，神仏を題材にしたもので，1970年代に登場した題材である。「金剛力士」は，仏教における天部の守護神で，仁王と呼ばれることもある。ねぶたでは迫力ある仏像の典型として，

鹿内一生が４回制作している。なかでも 1971 年の「金剛力士」（青森市職員互助会）は，一体の仏像が宙を睨むというもので，迫力ある一人ねぶたの流れを作った点で，ねぶた造形の歴史に残る作品として知られている。ただ，仏像だけのシンプルな造形のせいか，その後の受賞作としては，福井祥司作「那羅延堅固　金剛力士」（ＮＴＴグループねぶた, 1993）が製作賞（当時は５位の賞）を受賞しただけである。

「風神雷神」は，風の神と雷の神をセットで作った造形である。この他に雷神を単独で作ったものが４つある（雷神には菅原道真の化身を題材にしたものもあるが，その場合は「道真の祟り」として別にした）。初出は 1970 年で, 一戸泰英作「風神雷神」（消防第三分団）であるが, 佐藤伝蔵作「風神雷神」（日立連合，1974）が田村麿賞受賞作であり，二体を色の違いで表現したねぶたとして著名である。

以上，10 台以上制作された題材について概説してきた。とはいうものの，このように「定番」として何度もつくられたねぶたは少数派で，題材別に数えた場合，５台以下の題材が多いことも明らかになった。すなわち，５台の題材が 16，４台が 21，３台が 34，２台が 61，そして１台限りの題材は 325 もある。題材の判明したねぶた 1251 台のうち，１台だけの題材のねぶたの比率は 26％であり，５台以下しか作られていない題材のねぶたが 713 台（57％）と半数を超すのである。こうしてみると，確かに「定番」ねぶたがある一方で，新しい題材，一度限りの題材もまた数多いことが，青森ねぶた祭の特徴といえるであろう。

６．青森もの

題材面で青森ねぶた祭の現在の特徴ともいえるのが,「青森もの」の登場と増加である。もともと，題材の点では全国の山車祭礼や民俗芸能とさほど差がなかったねぶたが,「青森もの」の登場により，ぐっと青森の個性をアピールすることになった。

すでに述べたように，青森ものの本格的な登場は，1963 年の佐藤伝蔵作「南祖坊と八乃太郎決戦の場」（青湾信用金庫）と, 同年の佐藤直市作「津軽為信公大垣城の奮戦」（陸上自衛隊）からである。1980 年代に入るとさらに増加し，80 年代前半が７台，後半が６台，90 年代前半が９台，後半が 25 台，そして 2000 年代前半が 15 台，後半が 17 台という普及ぶりである。

これまでに登場した題材を台数順に表３にまとめた。ここからわかることは，いわば定番化した題材はさほど多くなく，試行錯誤が続いているということである。最多の「南祖坊と八之太郎」はすでに説明したとおり十和田湖伝説である。続く「縄文人」は，確かに青森らしいテーマである。三内丸山遺跡の発掘を受け，1995 年に千葉作龍が「三内丸山・縄文鼓動」（コマツ連合ねぶた）を制作したところから流行が始まる。これは，縄文人という特定の固有名詞を持たない人物を造形した点でも画期的なものであった。この題材は全部で８台作られ，しかもねぶた大賞受賞作３台を含め，すべてが何らかの賞を受賞したほど高く評価された。しかし 2001 年を最後に制作されていない。「義経渡海」は，青森以外でも広く知られた伝説であるが, 津軽海峡を飛び越えることから，青森ものと意識されている。「津軽為信」は津軽藩の開祖として青森を含む津軽地方でよく知られている人物である。「森山弥七郎の青森開港」は，青森開港に力のあった森山弥七郎を題材にしたもので，青森市制百年にあたった 1998 年に集中的に登場した。「鬼神お松」は，東北各地に残る女盗賊伝説であるが，青森では奥入瀬渓谷に隠れ住んだとされ，３台が作られている。このように，３台以上作られた題材は６つだけである。このほか，２台作られた題材が５つある。

そして１台だけ作られた題材が 33 もある。これらは１度だけ作られ，再登場しなかったことになる。再登場しない理由は,「個性的」であるために，他のねぶた師は模倣とみなされることを恐れて取り上げない，あるいはねぶたの標準的な題材からすると「独創的」でありすぎる，等が考えられる。

表３　青森に関係する題材

テーマ	台数
南祖坊と八之太郎	12
縄文人	8
義経渡海	8
津軽為信	8
森山弥七郎の青森開港	4
鬼神お松	3
阿倍比羅夫の津軽平定	2
北前船	2
雲谷の頓慶	2
東日流荒吐王	2
竜飛の黒神	2
赤倉山の鬼神	1
津刈丸の奮戦	1
大泊の鬼	1
小川原湖伝説	1
津軽三味線	1
ねぶた起源	1
ねぶた師	1
鮪一本釣り	1
湊騒動	1
源頼義の鬼退治	1
文殊菩薩と優填王	1
義経の鬼退治	1
安東高星	1
猿賀権現鬼面奉射	1
下湯根元記	1
貝倉明神と龍	1
刈田麿の鬼神退治	1
鬼神太夫	1
義人権太夫	1
金光上人と阿弥陀川	1
古館の白髭水	1
徐福伝説	1
常縁奮戦	1
青森に龍の毛降る	1
大河兼任の乱	1
大嶽丸	1
堤弾正の荒川治水	1
藤田民次郎の直訴	1
萩野台の合戦	1
八甲田の大人	1
北畠顕義	1
名刀鬼王丸	1
竜飛の黒神と男鹿の赤神	1

７．制作者による傾向

ここまでは制作者による違いを無視して全般的な傾向を述べてきたが，題材は制作者が決める以上，制作者の題材選択の傾向を考察すべきところである。しかし，この点に深入りすると制作者の芸術性を個別に論じることになるので，詳細は他日を期すこととし，今回は主なねぶた師の題材の好みを大分類の比率で明らかにするにとどめる。

表４は，題材が明らかになったねぶたを 30 台以上制作した 11 人のねぶた師について，題材の比率を示したものである。11 人の平均値と比較してみると，ねぶた師の「好み」とでも言うべきものが明らかになる。

「日本」については，佐藤伝蔵が 80％を，北川啓三，石谷進が 70％を超え，突出して比率が高い。「日本」にこだわった制作者ということになるであろう。逆に突出して低いのが竹浪比呂央で，３割を切っている。

「歌舞伎」は，北川啓三だけが 10％を超えている。実は北川啓三の作品には，曽我物語に取材した，いわゆる「曽我もの」が５台ある。今回はこれらを「日本」に分類したが，これは歌舞伎の題材としても著名であり，これを「歌舞伎」に分類した場合，北川啓三の「歌舞伎」比率は 23.4％にまで上昇する。これとは反対に，佐藤伝蔵と竹浪比呂央は１台も作っていない。

「宗教」は，鹿内一生，穐元鴻生，竹浪比呂央，千葉作龍が 10％を超している。いずれも仏像や日本神話を多く取り上げている。逆に石谷進は１台も作っていない。北川啓三も２％（１台）だけである。

「青森」も好みがはっきりと分かれる題材である。竹浪比呂央が 35.6％とずば抜けて多く，内山龍星が 17.6％で続く。一方，北川啓三，鹿内一生，北村蓮明がゼロ，石谷進が 1.2％（１台）と極端に少ない。

「中国」は，北村蓮明が 31.4％，鹿内一生が 29.4％と多く，逆に北川啓三と佐藤伝蔵が 10％以下である。

表４　ねぶた師別のねぶた題材比率（単位パーセント）

制作者	日　本	歌舞伎	宗　教	青　森	中　国	その他	総　計
穐元　鴻生	54.2	3.4	13.6	10.2	18.6	0.0	100.0
石谷　　進	76.5	7.1	0.0	1.2	15.3	0.0	100.0
内山　龍星	54.9	5.9	7.8	17.6	11.8	2.0	100.0
北川　啓三	78.7	12.8	2.1	0.0	6.4	0.0	100.0
北村　　隆	60.0	9.2	9.2	9.2	12.3	0.0	100.0
北村　蓮明	57.1	5.7	5.7	0.0	31.4	0.0	100.0
佐藤　伝蔵	82.1	0.0	4.5	4.5	7.5	1.5	100.0
鹿内　一生	51.0	3.9	15.7	0.0	29.4	0.0	100.0
千葉　作龍	54.7	8.6	11.5	10.8	12.9	1.4	100.0
竹浪比呂央	28.9	0.0	13.3	35.6	20.0	2.2	100.0
福井　祥司	60.9	6.5	8.7	6.5	17.4	0.0	100.0
11人の平均	60.7	6.1	8.4	8.6	15.5	0.7	100.0

全体として見ると，ここまで名前が挙がっていない北村隆と福井祥司は，比率が平均値に近く，突出した傾向が見られないのが特徴と見ることができる。千葉作龍は宗教，内山龍星は青森がやや高率であるものの平均値に近い。北川啓三は日本と歌舞伎，佐藤伝蔵は日本，鹿内一生は宗教と中国，穐元鴻生は宗教，石谷進は日本，竹浪比呂央は青森と中国，北村蓮明は中国の比率が高い。

制作者による制作傾向の違いは，単に題材の大分類だけでなく，細かな題材選択や，造形の傾向と合わせて議論すべき課題である。この続きは作家別の作品の特性や芸術性を論じる際に明らかにすることにしよう。

８．2010 年の題材例

それでは，実際の祭礼においては，どのような題材がどのように登場するのであろうか。現在，１回の祭礼には 22 台のねぶたが次々に登場する。観客は 22 台を順に見ていくことになる。そのことを題材の観点から見てみよう。

2010 年に出陣したねぶたは表５のとおりである。表中，回数とは 2010 年を含めてその小分類の題材が登場した回数である（団体の登場回数ではない）。

大分類を見ると，この年は「日本」13 台（59％），「中国」５台（23％），「青森」４台（18％）であった。「宗教」「歌舞伎」が１台もなく，「日本」がやや多いものの，ほぼ例年並みの比率である。ちなみに 2009 年には「宗教」が５台も出る一方で「日本」は９台と少なかったので，その反動があったかもしれない。

小分類を見ると，この年には「鴻門の会」が２つ登場した。しかも，北村隆，北村蓮明という評価の高い兄弟が同じ樊噲を作ったので話題になった。このような重なりはよくあることで，当然ながら比較されることになる。また，樊噲は過去に１度だけ制作されている。竹浪比呂央（当時は竹浪魁龍を名乗る）が 1995 年に制作した「漢楚春秋　剛勇樊噲」（青森マルハ俟武多会）である。樊噲の持つ巨大な盾に顔を描いたもので，１人ねぶたに顔が２つあるという斬新な造形が，以後のねぶたに大きな影響を与えた。このことから，今回の２作品は竹浪の作品とも比較されることになった。

回数の多いのは「戻橋」（マルハニチロ俟武多会）

表5　2010年出陣ねぶたとその題材

No.	運行団体	制作者	題名	大分類	小分類	回数	受賞
1	青森市役所ねぶた実行委員会	外崎　白鴻	怪力蒼海公と秦の始皇帝	中国	始皇帝暗殺	2	
2	サンロード青森	千葉　作龍	風待ち湊・深浦の残照	青森	北前船	2	優秀制作者賞
3	NTTグループねぶた	内山　龍星	奮戦・護良親王	日本	護良親王と足利尊氏の戦い	1	
4	日本通運青森支店ねぶた実行委員会	柳谷　優浩	天神菅原道真	日本	道真の祟り	6	
5	青森県板金工業組合	北村　蓮明	勇猛の将・樊噲	中国	鴻門の会	3	市長賞
6	マルハニチロ侫武多会	竹浪比呂央	戻橋	日本	戻橋	9	
7	青森山田学園	北村　　隆	碁盤忠信	日本	碁盤忠信	3	
8	JRねぶた実行プロジェクト	竹浪比呂央	天孫降臨　猿田彦	日本	天孫降臨	2	
9	青森市PTA連合会	内山　龍星	吉備津彦命・温羅を退治す	日本	吉備津彦の温羅退治	2	
10	青森菱友会	竹浪比呂央	阿倍比羅夫　津軽深浦に立つ	青森	阿倍比羅夫の津軽平定	2	
11	消防第二分団ねぶた会・アサヒビール	千葉　作龍	地獄変	日本	地獄絵の制作	1	
12	県庁ねぶた実行委員会	大白　我鴻	安倍貞任と八幡太郎義家	日本	安倍貞任と源義家の戦い	1	
13	青森青年会議所	内山　龍星	津軽為信　出世の誉れ	青森	ねぶた起源	1	
14	ねぶた愛好会	諏訪　　慎	三国妖狐伝	日本	九尾の狐	1	
15	私たちのねぶた自主製作実行委員会	私たち一同	赤倉山の鬼神	青森	赤倉山の鬼神	1	
16	に組・東芝	北村　　隆	豪勇　樊噲	中国	鴻門の会	3	観光コンベンション協会会長賞
17	あおもり市民ねぶた実行委員会	京野　和鴻	三国志演義「呂布と董卓」	中国	呂布と董卓の戦い	1	
18	青森自衛隊ねぶた協賛会	有賀　義弘	平四郎と血染めの下駄	日本	平四郎と血染めの下駄	1	
19	パナソニックねぶた会	北村　蓮明	水滸伝　混江竜・李俊	中国	混江竜李俊	1	商工会議所会頭賞、最優秀制作者賞
20	東北電力ねぶた愛好会	穐元　和生	奥州筆頭・独眼竜政宗	日本	伊達政宗	4	
21	日立連合ねぶた委員会	北村　蓮明	不動の剣、義仲を救う	日本	不動の剣木曽義仲を救う	1	知事賞
22	ヤマト運輸ねぶた実行委員会	北村　　隆	海幸彦　山幸彦	日本	海幸彦と山幸彦	4	ねぶた大賞、優秀制作者賞

の９回である。制作者は当然ながら過去の作品を念頭に制作している。制作した竹浪比呂央によれば，1970年の鹿内一生作「戻橋」（自衛隊青森駐屯部隊）を意識して,「鹿内名人へのオマージュ」として制作したという。「馬の名人」と言われた鹿内一生の作品と,確かに構図は類似しているが,馬の姿勢，茨木童子の襲いかかる勢い，雷鳴の表現などに制作者の独自の工夫が見られる。先駆者の作品をどのように受け継ぎ発展させたか，興味深い事例である。

また，初めて登場する題材が10と，半分近くを占めている。しかしその中には，過去の作品と似たテーマもある。「奮戦・護良親王」（ＮＴＴグループねぶた）は，護良親王と足利尊氏の戦いを造形しているが，護良親王を単独で作ったねぶたは過去に２台ある。「安倍貞任と八幡太郎義家」（県庁ねぶた実行委員会）も同様で，安倍貞任を単独で作ったねぶたは過去に２台ある。「三国志演義「呂布と董卓」」（あおもり市民ねぶた実行委員会）は，呂布を董卓と組み合わせたのは初めてだが，虎牢関の戦いをテーマにした，あるいは関羽と組み合わせたねぶたが過去に出ている。この３つを別にすると，残りの７つが純粋に初登場といえる題材で，全体の約三分の一を占める。制作者にとって，初めての題材は先例がないだけに自由に作れ，また題材の発掘者，先駆者としての誇りを感じることが出来る。その一方，ねぶたにふさわしい題材として評価されるかどうか，不安を感じる面もあるという[11]。

おわりに

以上，本稿は青森ねぶた祭におけるねぶたの題材について検討してきた。ねぶたは毎年作られるものであるから，ねぶた師の仕事がなければ祭りが成立しない。ねぶた師の最初の仕事は題材の選択であり，それが創造性を発揮する第一段階である。とはいうものの，ねぶた師は他のねぶた師の作品や，世の中の流行を無視しているわけではない。本稿は，戦後ねぶたの題材を総体として分析してきたが，時代に応じた変遷に一定の傾向があることが明らかになった。

次の機会には，現時点で不明であった時期の資料をより精査するとともに，ねぶたの形状と色彩がどのように変化してきたか，造形について検討することにしたい。

《注》

1　2000年に青森市から刊行された『青森ねぶた誌』に，戦後の変化についての原稿を寄せた［阿南　2000a］。またねぶた本体，主催者，運行コースの３点に注目した論考［阿南　2003］，暴れるハネト「カラスハネト」問題を取り上げた論考［阿南　2000b］［阿南　2005］，ねぶたのロサンゼルス遠征を扱った論考［阿南　2008］がある。

2　台数は，最も多い時期には25台まで増加したが，近年は22台で一定している。また，８月２日と３日には10台程度の子供ねぶたや地域ねぶたが合同運行に登場するが，ここでは考察外とする。

3　この人数は，７日夜の海上運行と同時開催される花火大会の観客数を含めたものである。最近では，花火大会を別行事として人数に合算しなくなったため，300万人程度になっている。

4　名称はねぶた，ねぷた，ねぶながし等さまざまである。ちなみに県内主要都市のねぶたを見ると，弘前市では青森市のような人形の形をした「組ねぶた」は少数派であり，扇形の行灯に武者絵などを描いた「扇ねぷた」が主流である。また黒石市は，形態は弘前風の扇ねぶた，青森風の人形ねぶたの双方あるがやや小ぶりで，人形ねぷたは三段～五段の高欄の上に載せるのが特徴である。そして70台を超えるという台数の多さを誇りにしている。五所川原市では，1996年までは小型の組ねぶたが十台ほど出るだけであったが（しかもその多くは木造町で使用したものを購入していた），1997年に制作された高さ22メートルの「立佞武多」が瞬く間に行事の中心となり，2000年には大型３台のほかに中型も３台登場し，他都市にはない「立佞武多」が特徴になった。

5　青森市の主なねぶた師については，［澤田　2004］［澤田　2006］［成田　2000］などに紹介がある。

6　1959年に北川金三郎，1985年に北川啓三，1986年に佐藤伝蔵，1990年に鹿内一生，以上四人に贈られている。

7　このほかに部門賞もある。このような表彰制度は，1962年に制定された総合１位の賞「田村麿賞」に端を発し，賞の数は時代とともに増加している。この点の概要は［阿南　2000a］で述べた。

8　制作台数が最も多いのは千葉作龍の139台，２位は石谷進の85台である。「題材が明らかな」ねぶたに限っては，後述のように30台以上制作した制作者は11人しかいない。北川金三郎など，戦後まもなく活躍したねぶた師も同程度の数を制作している可能性があるが，資料が不確かであり，現時点では断定できない。

9　私は断片的な資料をもとに，可能な限りねぶたの題名を収録した，戦後大型ねぶた一覧表を作成したことがあるので［阿南　2000a］，今回もそれを参考にした。

10　今回は「題材が明らかな」ねぶたを30台以上制作し

た制作者だけを取り上げた。北川金三郎など，戦後まもなく活躍したねぶた師も数多くの作品を制作しているが，題材が不明確であったため今回は除外した。また，北村隆と北村蓮明は12台を合作しているが（他に北村健を加えた3人合作もあり），本章での考察からは除外した。

11　極端な例としては，2008年に京野和鴻作「覇邏王・ラムセス二世」（あおもり市民ねぶた実行委員会）という，エジプト史に題材を取ったねぶたが登場した。アジア以外の題材は初登場であったため，賛否の議論を巻き起こした。

阿南透　2000a「青森ねぶたの現代」宮田登・小松和彦編『青森ねぶた誌』青森市
阿南透　2000b「青森ねぶたとカラスハネト」日本生活学会編『祝祭の一○○年』ドメス出版，pp.175-198
阿南透　2003「青森ねぶたの現代的変容」『国立歴史民俗博物館研究報告』103，pp.263-297
阿南透　2005「都市祭礼の空気は自由にする？－青森ねぶた祭における騒動と統制」『三田社会学』10，pp.46-56
阿南透　2008「祭りの海外遠征－ロサンゼルスの青森ねぶた」『情報と社会－江戸川大学紀要』18，pp. 21-39
澤田繁親　2004『龍の夢－ねぶたに賭けた男たち』ノースプラットフォーム
澤田繁親　2006『龍の伝言－ねぶた師列伝』ノースプラットフォーム
成田敏　2000「青森ねぶたの形態とそれを支えた人々」宮田登・小松和彦監修『青森ねぶた誌』青森市